

1. バロック音楽ブームについて

NHKの「バロック音楽の愉しみ」の解説者でもあった皆川達夫氏は、その著書「バロック音楽」(2006年、原著1972年)の中で、日本の「バロック音楽」ブームについて、以下の主旨の分析を行っています。

「バロック音楽は一切の先入観や観念を必要とせず、演奏家と聴衆が一体となって、虚心に音の流れに浸れる魅力がある。音楽を頭からではなく、耳から、そして心から、聴き入る愉しみ方を与えてくれる。それは現代のクラシック音楽がほとんど失ってしまった大切なものであろう。遠い昔の異国の音楽であるにもかかわらず、バロック音楽に接すると、音楽が本来持つ楽しさを再発見することができる。これが近年の日本におけるバロックブームの一因ではないだろうか。」

現代のクラシック愛好家が聴く対象は、主にモーツァルト、ベートーヴェンなど古典派以降の作曲家の音楽が大半であり、それが「クラシック音楽」と理解していると思います。しかしクラシック音楽も、その発展の歴史を300年ほど遡れば、ヨーロッパ音楽の根源である「バロック音楽」に辿り着きます。それは音楽本来の魅力に満ち、楽しさに溢れた、若々しい世界でした。



「バロック音楽」(皆川達夫)

2. バロック音楽の時代と楽器

バロック以前のルネッサンス時代の音楽は、声楽を中心とした、ミサ曲などの宗教作品が主でしたが、バロック時代は器楽音楽と劇音楽が主流となりました。その背景には、この時代に楽器の奏法が開拓され、それに伴って今日のような管楽器、弦楽器、鍵盤楽器などが急速に発達したことがあります。例えばバイオリンは、ストラディバリなどがイタリアで楽器を精力的に製作していた時期と重なります。彼の作品は今日でも現役であるだけでなく、並外れて優れた楽器であることは言うに及びません。このような楽器の登場が、芸術家の創作意欲を大いに掻き立て、インスピレーションに満ちた器楽音楽が、数多く生み出されていったと考えられます。

バロック音楽は、このような時代に発展期を迎え、本格的な音楽の源流となりました。しかし、それは音楽史の上で語られるだけの過去の存在では決してありません。バッハ、ヘンデルの曲などは、バロック音楽の頂点であるだけでなく、現代でも強烈な魅力をもった躍動感あふれる音楽として、今なお世界中で多くの人々に愛されています。



ストラディバリと製作したバイオリン



バッハ、ヘンデル (青年期)

3. 独奏と合奏の対立が生み出す緊張とドラマ

バロック音楽では、怒り、悲しみといった人間の感情が旋律、リズムなどで強く表現されます。特に協奏曲の形式では、ソロとトゥッティ（合奏）の対比を効果的に強調する手法が用いられます。この二つの要素の対立、葛藤が大きいほど、ドラマは充実し、心の奥底に食い込む感動的な音楽表現になるわけです。本日のプログラムにあるバッハの協奏曲（ブランデンブルグなど）では、いくつものソロ楽器を互いに競奏させ、トゥッティ（合奏）との対立、緊張の中から、華やかで劇的な音楽が展開されます。

4. 即興演奏の新鮮な喜び

さらにバロック音楽では、奏者が聴衆のごく近くで演奏するため、その場での手造りの演奏が好まれ、奏者にかなりの演奏の自由が認められていました。

本日のプログラム第1部の最後に演奏される、ヴィヴァルディのオーボエ協奏曲の第2楽章では、オーボエのソロと対比される通奏低音、特にチェンバロは、即興的な装飾をまとって華やかに演奏しますが、このような装飾は作曲された当時の楽譜にはほとんど書かれていません。



聴衆と一体化した演奏会

バロック音楽特有の低音部の書法は「通奏低音」、あるいは「数字つき低音」などと呼ばれています。

主旋律を弾くのはバイオリンなどの上声部ですが、チェンバロ奏者は、左手で楽譜に書かれた音符どおりに弾きながら、そこに書かれた数字や記号を手がかりに、右手で即興演奏をします。どのように弾いても自由ですが、基本は数字で指示された調性がベースとなります。

左手の音符



この数字(基本和音)を基に右手で即興演奏する

通奏低音の楽譜の例



当時のチェンバロ

このような数字や記号による即興演奏をやめて、克明に楽譜に演奏内容を書きつけてしまうと、演奏は楽になりますが、一回ごとの新鮮な喜び、ニュアンスを与える音楽の生命力の炎も消えてしまいます。

このような即興演奏には、それを期待し、反応する聴衆の存在が欠かせませんが、現代のクラシック演奏会では、大ホールでの演奏が多くなったこともあり、このような即興演奏はあまり見られなくなりました。

しかしクラシック以外の、例えばジャズなどの音楽ジャンルでは、比較的小編成のアンサンブルで、古き良き時代のバロック演奏会と同じように、演奏家と聴衆が一体化した雰囲気が楽しめることが多いようです。

5. バロック音楽の愉しみ方

以上のように、バロック音楽の特徴とその魅力について、皆川達夫氏の著書「バロック音楽」を参考に、述べさせて頂きました。最後に本題の「バロック音楽の愉しみ方」に入りたいと思いますが、冒頭で紹介した皆川達夫氏の以下の言葉に、その本質が語られていると思われます。

「バロック音楽は一切の先入観や観念を必要とせず、演奏家と聴衆が一体となって、虚心に音の流れに浸れる魅力がある。音楽を頭からではなく、耳から、そして心から、聴き入る楽しみ方を与えてくれる。」

これまでの日本では、情操教育の一環としてクラシック音楽を学び、その延長で音楽を捉え、音楽を先ず頭で理解しようとする接し方も多かったと思われませんが、バロック音楽では、一切の先入観や観念を捨てて、虚心にその音の美しさを感じ、音の流れに浸れば良いわけです。

また、バロック音楽の醍醐味を味わうには、奏者と聴衆の距離を縮めることも重要ですので、本日の演奏会では、日頃より栄フィルを暖かく支えて頂いている賛助会の方々に限定し、バロック音楽に適した比較的小さなホールに、皆様をお迎えすることと致しました。

本日の演奏はバロック時代のように、小編成のアンサンブルです。バロック音楽を愛する栄フィルの有志が、一期一会の覚悟で演奏会に臨みます。

コロナ下ではありますが、皆様との音楽的な距離はできるだけ詰めて、「バロック音楽の楽しみ方」を再現できればと願っております。

それでは栄フィルのバロックコンサートをお楽しみください。



小編成のバロック時代の演奏会